

【*】里山とは

(1) 次の①・②・③を構成要素とする。

①里山林・・・雑木林

②田んぼ・畑

③里草地 (①と②との間)・・・ため池・用水路・畦

*里山を、①の里山林に限定して考える場合もある。

(2) “群集の不均一性による多様度”(※1)や「不安定でかつ安定な」環境(※2)によって豊かな生命(多種多様の動植物)が育まれてきた。

(※1)モザイク状になっていること、変化に富むこと。様々な構成要素があり、それらのそれぞれがまた変化をもっていること。例えば、里山林は一定面積が何年おきかに伐採されることでいろいろな段階(様々な年齢)の林であったし、下刈りがされているところとされていないところがあった、といったことである。

(※2)田んぼに水を流し込み、それによりため池の水位が変動し、用水路に水があふれるといったことや里山林の一定面積が何年おきかに一斉に伐採されるなどのこと。

【1】過去

(1)かつて日本の南半分はうっそうとした暗い原生林が覆っていた。それは、年間を通して常緑に輝く葉を持つカシ、クス、シイ、タブ、ツバキ類等であった。これらの常緑広葉樹林を総称して「照葉樹林」という。

太古の昔、照葉樹林帯は中央アジアのヒマラヤ山脈麓(現ブータン)を起点として中国南部を経て日本に至るまで、ベルト状に分布していた。照葉樹林帯の各地周辺では、よく似た食文化、農業、風習、宗教、伝説が今に伝えられている。同根の文化圏が時空と場所を越えて発生していたのである。たとえば、ヤムイモやタロイモ、アワ・ヒエ・イネなどのモチ種、そしてナットウなど、数多くのネバネバした食品を好む性質、茶やシソの栽培、麴から作る酒、養蚕、漆器文化などである。これらは元来、照葉樹林帯独自の文化であり、これより北にも南にも存在しなかった。海路も陸路もおぼつかない太古の昔、民族も国家も違い、交流も薄かった筈の地帯に見られる驚くべき共通点一、これを「照葉樹林文化」と名付けて体系化し、提唱したのが栽培植物学者の中尾佐助氏である。(中略) 照葉樹林は、温暖で雨に富む湿潤地帯にのみ発生し、森林の蘇生力が非常に強い。つまり、いくら樹を切っても自然の状態にもどせば砂漠化せず、やがて常緑の森林にもどってしまうのだ。(中略)

一方、日本の北半分はナラ、ブナ、クリ、カエデ、シナノキなどの温帯落葉広葉樹林に覆われていた。南方に連なる照葉樹林文化に比して、朝鮮半島から東アジア一体に連なる温帯落葉広葉樹林帯の文化を「ナラ林文化」と名付けたのも中尾佐助氏であった。ナラ林文化の特徴は、照葉樹林帯よりも食料資源が豊富であったことだ。砕けば食べられる堅果が大量に落ち、日光照射もあるため森の下草である植物種も豊富である。そこには当然狩猟対象となる動物も多い。堅果類(クリ・クルミ・トチ・ドングリ)、球根類(ウバユリなど)の採集。トナカイ、熊、鹿、海獣の狩猟。そして、川にのぼって来るサケ・マスの漁撈。これらの狩猟・採集文化により、

一定の人口までは十分に生活出来たのである。日本の縄文文化は、主にナラ林文化の下で発展した。事実、縄文時代の遺跡群は圧倒的に東北日本に集中している。

稲作と鉄器の文化は、弥生時代に渡来人によって伝えられたと言われる。弥生文化は、北九州を起点に、食料資源の少ない照葉樹林地帯に急速に広まったが、中部以北にはなかなか伝わらなかった。南とは食体系が違い、北では採集・狩猟・畑作資源が豊富なのであるから、わざわざライフスタイルを壊して稲作を始める必要がなかったのである。しかし、(中略) 純粋なナラ林文化は、照葉樹林文化と融合した稲作文化に吸収され、十二～十三世紀にはほぼ崩壊したとされる。(中略)

映画『もののけ姫』は、一言でくれば、人間が原生林を破壊して焦土と化した地に、奇跡的に緑が芽吹いて二次林(人の手が増えらることで維持される森林)と里山が復活するという内容である。

<叶 精二『「もののけ姫」を読み解く』(97.8) より>

(2) 稲作の普及と共に、「照葉樹林文化」や「ナラ林文化」が受け継がれながら、一次林(照葉樹林やナラ林という自然林=原生林=天然林)が切り開かれて二次林や田畑がつけられ、里山が成立していった。

(3) 里山林(二次林)・・・人間に役立つものになるよう手が増えられて成立し維持されてきた。

①農用林として成立

里山林は、私たちの祖先が弥生時代から今日まで、およそ2000年にわたって営んで来た水田稲作農耕と深くかかわって発生した。すなわち水田農耕では一定の土地を繰り返し使用するため、土地がしだいに痩せて来る。そこでこれらの土地への施肥の必要から、集落近くの森林から落ち葉や下草を集め、人や家畜の糞尿とともに堆肥として田や畑に働き込んだ。また落枝や下木は「いろり」や「かまど」で燃料として使われたあと、木灰として灰桶に集められカリ肥料として田畑に撒かれた。私たちが最も身近な自然として親しみのあるアカマツ林は、このような森林からの養分奪取の結果生まれたものと言われている。

②この他農具や生活用具を作るための用材林、田や畑への用水や飲み水を確保するための水源林、さらに「みやこ=都市」の成立と拡大によって大量のマキや炭の需要が起り、そのためのクヌギ・コナラ(地域によってはケヤキ、ブナ、ナラガシワなどのナラ属や、ウバメガシなどの専用林が作られた)などからなる薪炭林などが近年まで大切に維持されて来た。

③里山林は昔から農用林などとして利用されるだけでなく、その地域の人々にとってのレクリエーションの場として、四季折々の行事と共に広く使われて来た。春は山菜摘みや花見、秋には紅葉狩りや「きのこ」取りといった、地域ぐるみの行楽の場でもあった。

このようにして発生した里山林は、ブナの原生林や天然林などと異なり、我が国に農耕文化が伝えられて以来近年までずっと人手の加わり続けた活用林野であり、二次的に成立した自然である。そのためその態様は人々の歴史とともに変遷しつつ、自然と人間が織り成す独特の風土、景観を作り上げている。

【2】現在

(1) 変わりいく里山

①里山林は活用されなくなった。その**第一**の原因は、1960年頃から急速に普及し始めたプロパンガスや都市ガス、そして石油や電力などへのエネルギー源の転換によって、マキや炭などの木質燃料が使われなくなったこと、**第二**に農業における化学肥料と農薬の使用によって有機肥料が使われなくなり、落ち葉掻きや下草刈りなどをしなくなったこと、**第三**に家庭用品や農具などに木材、竹といった天然材を使用しなくなり、プラスチック、合成樹脂、金属器具が使われるようになったことなどが大きな要因と考えられる。**さらに**、高度経済成長政策による労働者の都市への集中と、都市の拡大による田畑の宅地化が進み、農用林が不用となったこと、農業の集約化、産品の単一化がはかられ農業の機械化・企業化が進んだこと、「米」の生産過剰による休耕田や転作補助金政策によって営農意欲を減退させたこと、農業従事者の減少と高齢化が進んだこと、そして拡大造林による林業政策の失敗などが上げられる。

②里山林が活用されなくなったということは、田んぼ・畑や里草地を含む里山全体が放置されつつあることを意味する。

(2) (1)の状況が進む中で、里山は宅地造成やゴルフ場建設の対象とされてきた。しかし、90年代初頭(バブル崩壊)頃からその存在意義が注目され始めてきた。

【3】未来・・・「第2工区＝里山」の開発は行わないと決定された場合。

(1) 里山の存在意義

①豊かな自然体験の場

ただ放置されるばかりの里山。それをもう一度、豊かな環境へと戻すにはどうすればよいのだろうか。都市に生活する市民こそがその担い手である。都市に生活する市民が休日近くの里山へでかけ自然の中で作業を楽しみ、季節を楽しむ…。そんなことがあたりまえになればいい。里山を愛し、里山を楽しむ人を増やすことは“経済”ではなく“環境”を優先すべき21世紀の大きなステップになるだろう。

1) 楽しみ方別里山林タイプ

里山林の自然の楽しみ方は森林の構造や植生の差異、そして季節によっても異なる。森林におけるレクリエーション利用に対応した林床タイプには次の6つがある。

タイプ1	休息	低茎草本型林床
タイプ2	自然遊び	高茎草本型林床
タイプ3	散策・探勝	紫草型林床
タイプ4	草花観賞	野性草花型林床タイプ4
タイプ5	花木観賞	野性花木型林床
タイプ6	保全・緩衝	雑木型林床

<詳しくは、『里山管理ハンドブック(抜粋)』P.5～7 参照>

2) この他にも場所によってはキャンプや飯ごう炊さん、それにオリエンテーリングやフィールドアスレティックの楽しみなどもある。

3) 1)・2)は、そこに用意されたものを楽しむのが主体となる。ところが、実はまだ究極の

里山の楽しみが残されている。その楽しみとは、以上のような楽しみの中をつくりだしたり、維持管理するための活動や作業に、主体的に参加することである。自由な雰囲気の中で楽しむ、自分のできる範囲で柴刈りや下草刈り、間伐、山道の補修などをするのであるが、野鳥のさえずりや、谷川のせせらぎを聞きながらの作業はなかなか楽しいもので、心身ともに充実する。自分達が下草刈りした里山で草花の開花を楽しんだり、自分達の架けた木橋を渡るなんて、想像するだけでも愉快である。さらに、間伐材で炭を焼いてバーベキューを楽しんだり、木工に興じたり、はたまたシイタケ栽培を試みたり、落ち葉や炭を畑に鋤き込んで有機栽培を楽しんだり、里山を核とする楽しみは、人それぞれにどんどん広がっていく。

4) 自然観察や環境教育の場としても里山は活用できる。

5) 里山の的確な管理によって、そこが以上のように快適で楽しい「遊山」の場となれば、それが結果的に国立公園などの過剰利用を軽減させることにつながり、それだけ自然のブナ林や高山植物群落など、自然の聖域が守られることにもなる。

②里山は多種類の植物で構成されており、さらに落葉・落枝を分解する土壌動物や土壌微生物、それに野生動物や野鳥も一体となった、多層社会(生態系)を形成している。人間がいつまでも健康的に、安心して生活していけることを望むと同時に、これら里山の動植物も安心して生きていけるように、その生息場所を守ってやらなければならない。なぜなら人間自身が生きながらえ、また、もっと知的で文化的な生物にレベルアップするためにも、里山の動植物はもちろん、微生物に至るまで、良き協力者として、また未知の情報の提供者として、無くてはならない存在だからである。現に人間は里山の動植物や微生物から様々な薬品を得てきており、そこは、まだまだ未知のものが無数に秘められている宝庫でもある。

③里山林には環境保全機能がある。炭酸ガス(CO²)の吸収、大気の浄化、高温化する都市気温の調節、雨水を一度に流さずに土壌に含んだり、地下水へ浸透させる機能、それに草木の根株で土が崩れるのを防いだりと、見えない所で私達の生活を守ってくれている。

④里山林の生産機能は無視できない大切な機能。薪炭林や農用林としての役割を失った現在では、クヌギ・コナラ林の一部が、シイタケ栽培用の楳木(ほだぎ)や製炭用に利用されているに過ぎないのが実状。世界的な森林資源の枯渇に、石油危機の不安、さらに石油のような化石燃料の消費が、地球温暖化の原因になるものとして、今後その使用規制が避けられない状況にある。その意味で、里山の森林は再生産と持続的な利用が可能な資源として、つまり、広葉樹材の国内自給や燃料の安全保障の役割を果たすものとして、重要な潜在力を秘めている。世界は既にグローバルな地球環境危機の時代に入り、さらに資源の枯渇や食糧危機の不安、人口爆発など、様々な問題を抱えている。英国では、雑木林がパルプ用材やフェンス材料として見直され、管理と活用が再開されている。国内的にはたとえ経済的に引き合わなくても、それだけ熱帯雨林や北洋林が破壊から守られるという地球的視野の価値観に立ってのことなのである。もはや、いくら生産性を追い求めても、地球環境が左前になってしまっただけでは、どうしようもない事態に直面していることを、国家も、少なからぬ国民も認識しているからである。

⑤里山での活動によって市民や老人達の健康が増進すれば、行政の医療負担が軽減することになり、また、市民の自然や環境に対する認識が深まれば、ライフスタイルの見直しに

よりゴミ総量が減少して、行政の処理負担は大幅に軽減することになる。さらに、里山での自然活動の中から生まれてくる連帯心や、創造性のある個性ゆたかな人格形成によって、地球環境危機や高齢化社会に対応できる人づくりにもつながる。「いじめ」「非行」などの教育問題はもちろんのこと、大人社会における社会病理的問題も、相当に解消するものと考えられる。

(2) 市民による里山林管理

里山林が「遊山」の場や自然探勝の場として優れ、レクリエーションや自然観察に適しているとはいえ、長い間放置されて密生状態にある現在の里山林を、そのまま利用することはできない。私達が林間で楽しいひと時を過ごすには、下刈りや間伐などの管理を定期的に行なわなければならない。それには多くの人手が必要となる。

① 必要な作業

1) 下刈り(柴刈り)・・・森林が伐採されると、切り株からの萌芽の成長や、アカマツのように種子から芽生えた実生の成長によって、もとの森林に再生していく。これらの萌芽や実生、苗木が雑草に覆われて成長不良になるのを防ぐには、毎年一回、雑草類の抑制に最も効果のある夏期に下刈りしなければならない。

2) 間伐(間引き)・・・若木が成長して雑草よりも高くなれば、それ以後の下刈りは必要でなくなる。その代わり、次には間伐(間引き)によって、立木の本数を調節してやる必要がある。それは、樹木どうしの生存競争によるエネルギーの無駄を省き、また森林のモヤシ化を防ぐためである。間伐によって林内に陽光が射し込むようになり、森林の種組成がそれだけ多様になる。

② 市民による里山林管理の意義とその進め方

長い間、農家の人々の仕事であったの管理をいきなり都市に住む市民に…といってもそこには色々な問題がある。実際に活動を始める上でクリアすべきポイントと解決のためのヒントは次の通り。

1) 市民参加の意義

どんなに里山が大切だと説いても、放置してあるだけでは里山は守れない。また、里山以外に行き場のない動植物たちも、里山林の自然遷移が進行して常緑広葉樹林となり、もはや里山でなくなってしまうと、生きていく術を失ってしまう。里山の自然環境とそこに生きる野生生物を守るためにも、今では遊離してしまった里山と人との関係を、もう一度再構築することが必要。しかし、再構築といっても、誰がそれを担うかが大きな問題である。かつては生産の場として機能していたからこそ、里山は所有者によって維持管理され、望ましい状態で存続することができた。現在の社会では、アカマツ林やクヌギ・コナラの雑木林で、いかに経済的な生産性を上げようと努力しても、おのずと限界がある。そこで必要になるのが、里山の所有者、市民、それに行政の三者のパートナーシップによる里山の保全・管理システムの形成である。

2) わが国において、市民による自然復元のネットワークが形成され、着実な活動成果をみせるには、市民自身のやる気はもちろん、行政や企業が(1)で述べたような里山の今日的意義を踏まえて、環境問題、都市問題、教育問題、医療問題、老人問題などとも連動させて、複眼的思考のもとにこれをバックアップできるかどうかにかかっている。

(3) 里山保全策

里山は二次的自然（人が適切に手を加えることで成り立つ豊かで多様な自然）であり、「群集の不均一性による多様度」維持が大切→保全のためには手を加える（不安定でかつ安定な）環境をつくることも含む）ことが必要。つまり利用・活用することで維持される。下記のもが提案されている。

①里山林について

1) 自然体験の場としての里山林活用・・・(1)-①で述べたこと。

2) 木質発電（木力発電）

里山林（雑木林）を定期的(15年おきぐらい)に一定面積を一斉に伐採し、伐採した木材を燃やして発電する。石油や原子力などとは違ってほぼ完全な循環システムを構築できる。

◇蒸気タービン方式・・・薪を燃やした熱で蒸気を発生させ、それで発電機を回す。

◇ガスタービン方式・・・薪を蒸し焼きにしてガス化させてガスタービンを回して発電。こちらは住宅地の近くにも設置でき、エネルギーを有効利用できるコジェネレーション(電力と共に熱も提供)もできる。

3) 新しい炭焼き・・・セラミック炭（多機能特殊炭化物）製造

この炭は環境資材（水質浄化材、除湿材、脱臭剤、土壌改良剤）である。燃やそうとすれば燃えるが自分からは早急に燃えず、水に沈む。

②田んぼ・畑と里草地について

1) 農業の担い手の広域公募や市民農園（クライネガルテン）などの多様な手法による放棄田の復元。

2) バイオディーゼル・・・田畑でナタネを栽培し、それでつくったナタネ油をエステル化してディーゼル燃料とし、ディーゼルカーなどに利用。これが普及すれば、耕作放棄された耕地をもう一度耕地に戻すことが出来る。

(4) 各地の保全案（大規模なもの）

★箕面の「水と緑の健康都市」（大阪府箕面市）開発(※)にかかる保全案

(※) 計画面積 約 314ha/計画戸数 5000 戸/計画人口 16000 人。大阪府企業局。

計画面積の2割強に当たる約62haが造成されたところで、オオタカ保護や採算性への懸念などから開発を造成済みの部分に限定する方針が打ち出された(01.2)が、02年春になって再び開発拡大の動きが出てきた。

「水と緑の健康都市の計画地を“里山保全・モデル研究ゾーン”として保全活用していく構想」 (社団法人大阪自然環境保全協会/01.2.5現在)

[1] 趣旨

水と緑の健康都市は、計画区域内に「種の保存法」指定種で絶滅危惧種(Ⅱ類)でもあるオオタカが生息し、また、大阪府の財政課題につながる採算性の懸念などから、中止を含めた計画の縮小が検討されています。

こうした状況を踏まえるとともに、計画区域がオオタカの生息を可能とし、これを象徴とする豊かな生態系を維持してきたことを考える時、計画区域については将来もその生態系を極力保全し、現在では貴重となった都市近郊の自然の持続的な活用を図ることが、必然的な在り方だと考えています。

当協会は都市圏の自然環境保全団体として四半世紀、人為と接する「身近な自然」の保全を主なテーマに、調査、政策提言、普及啓発に取り組んでおり、このたび、健康都市開

発計画が縮小されるにあたり、標記の構想を提案させていただきます。

[2] 方針

- ①既造成区も含めた計画区域は、循環型社会の形成を目指して、里山の多様な機能・潜在価値を実践活用するための「モデル研究ゾーン」と位置づけ、同時に、オオタカも生息できる生態系を維持・復元する地区として整備します。
- ②このような本格的な「モデル研究ゾーン」も生息できる生態系を維持・復元する地区として整備します。
- ③このような本格的な「モデル研究ゾーン」構想は、まだ例がありません。それは、単なる“里山公園づくり”ではなく、里山の持続可能な活用を今日の社会経済システムに組み入れるという、環境保全分野の今日的な課題に取り組むものです。
- ④また、自然を活かすため、大きな投資を避けることができます。

[3] 里山保全・モデル研究ゾーン

①既造成区域(約 62ha)

1) 里山保全活用研究所の施設整備

◇里山に関する保全、活用について総合的に研究し、実践する機関。ハード施設を整備、その運営ソフトを構築する。施設外部のフィールドと一体化させる。

◇参画対象は、地元住民(組織)、大阪府立大学などの研究機関、行政、里山関連の研究をしている民間団体、里山保全に取り組んでいるNPOなど。

2) ビジター・宿泊施設の整備

◇「モデル研究ゾーン」全体に関するビジター・宿泊施設を整備する。

◇利用対象は主に、里山保全活動に取り組むボランティアや、各種の里山関連企画の参加者など。

3) 植栽・植林ゾーン

◇緑を復元するとともに、その生育や環境の変化などを継続的に研究するゾーンとして活用する。

◇この事業計画区域は、ヤブムラサキコナラ群集、モチツツジアカマツ群集の代償植生が大部分を占めており、これらを中心に、一般府民参加による植栽・植林を行う。

4) 植物遷移ゾーン

◇植物群落が環境に適合し、遷移していく過程を、一次的な段階から継続的に研究し、今後の開発などの保全施策に活かすためのゾーン。

◇継続的な研究・調査も、一般府民の参加協力を求めて実施する。

5) ビオトープ(生物空間)などの復元ゾーン

ビオトープの整備により、生物の繁殖を促し、場合によっては、絶滅危惧種の生育を助ける研究、実践にも活用する。

②その他の区域(造成断念区域/約 252ha)・・・里山などとして保全し、適切に管理するゾーン。

1) 保全ゾーン

大阪府水と緑の健康都市オオタカ調査委員会の提言(2001年1月19日)を踏まえながら、オオタカの生息を維持し、その生態系の保全策をさらに調査研究し、検討実施していくゾーン。

2) 里山管理的保全ゾーン

◇この事業計画区域が従来より薪炭林などとして利用されてきた経緯から、「保全ゾーン」を除くエリアについては、いわゆる里山管理手法により、かつて農用林として活用された程度の二次林として維持。遷移の進行などによって減少していると考えられる生物多様性を高めていく。

◇こうした管理は、ここ10年間にもみられるように、自然保護団体のボランティアや行政・関係機関が一般募集する参加者の手によって行われる例が増え、全国的にもブーム化しつつある。近畿では社団法人大阪自然環境保全協会などが取り組み、そのニーズは高いと言え、府民などから募集し、管理を実践していく。

◇里山の活用—上記の管理により次のような持続的活用を実践する。

- a. 里山の保全に関する生態的、文化的、社会的な調査、研究と応用＝里山保全活用研究所の演習林的な活用
- b. バイオマス(伐採木などの有機物資源)利用の調査研究と技術開発、利用
- c. 自然環境ボランティアの育成と育成ソフトの開発
- d. 自然環境教育・学習、レクリエーションの拡充・里山管理体験／自然観察／水田・畑などの総合的な農事体験／キャンプなどの野外活動など
- e. 「里山文化」の継承

[4] 計画策定

基本構想・計画の策定にあたっては、地元、行政、学識者、NPO、民間企業などで構成する「策定委員会」を設置して行う。

★海上(かいしよ)の森(愛知県瀬戸市/万博会場予定地/ 540ha)にかかると保全案

市民が提案する「国営瀬戸海上の森里山公園」のマスター・プラン

(国営瀬戸海上の森里山公園構想をすすめる連絡会の提案/99.11)

*あらまし

1. 海上の森の歴史(江戸から現代へ)
2. 愛知県内でまとまって残されている里山、海上の森が豊かな理由
3. 万博・新住〔宅市街地開発事業〕計画と国営公園構想—キーワードは「里山」
4. 生き物にとっても人間にとっても気持ちの良い場所に—里山公園をめざして

*はじめに一なぜ、今、里山公園構想を提案するのか？

①今、なぜ「里山」か？

1. 「里山」の消失と生態系
2. なぜ、「里山」が重要なのか？

②愛知県の里山分布と海上の森の歴史

1. 愛知県の里山分布と猿投山一帯の連続した森の意味
 - 1) 愛知県の里山マップ
 - 2) 愛知県の里山の激減とその林相変化
 - 3) 海上の森を含む猿投山一帯の重要性
2. 里山としての海上の森の歴史がもつ意味
 - 1) 海上の森の里山林はどのようにして利用されていたのか？
 - 2) 1948年の航空写真の判読による海上の森の土地利用
 - 3) 1965年の写真判読
 - 4) 1987年の写真判読

③わたしたちの国営里山公園構想の提案

1. 「国営公園」とは何か？
 - 1) 都市公園の中の国営公園の利点
 - 2) 愛知県、瀬戸市の行政にたずさわる皆さんへ
2. 「国営瀬戸海上の森里山公園」の基本理念・目標と管理運営の原則
 - 1) 基本理念
 - 2) 目標
 - 3) 整備計画および管理運営の原則
3. 里山公園構想の具体化の基本的な考え方
 - 1) 海上の森の地域的特性を生かす。
 - 2) 昔ながらの里山林の活用
 - 3) 現在の里山管理
 - 4) 生物多様性を損なわないための研究機能の重要性
 - 5) 里山の民俗・文化の保存
 - 6) 公園の運営への市民参加の実現
 - 7) 子どもから高齢者・身障者への配慮
 - 8) 「自然と共生する景観」を作り出す
4. 里山公園ではどんなことをやるのか？
 - 1) 海上の里の田んぼ耕作と管理、放棄された田んぼの復活、無農薬・有機農業
 - 2) 里山林の手入れ
 - 3) 水辺の管理
 - 4) 自然観察会、探鳥会など
 - 5) 体験の伴った環境教育の場へ工夫
 - 6) 穴窯よる里山の利用の再現
 - 7) 海上の里の民俗・文化の展示、多度神社の馬追い神事の復活
5. 生物多様性を保持するための里山林の生態学的な管理方法の研究
6. 必要となる施設
7. 海上の森の里山公園の整備計画
 - 1) 海上の里の生活の息吹を伝えるエリア
 - 2) 大正池・篠田池・・・雑木林の水と木と風を楽しむエリア
 - 3) 屋戸川流域の貧栄養湿地・・・貴重種に出会えるエリア
 - 4) 物見山周辺・・・人口林と見晴らしの良い高台のエリア
 - 5) 吉田川流域・・・鳥の声、水の音、そして静けさを楽しむエリア
 - 6) 古窯・古墳・・・歴史・文化・生活を今に生かすエリア
8. 地域配置プラン

*おわりに—今までなかった新しい「里山公園」の提案

*あとがき

(以上)